学苑　第八〇九号　四一～四八（二〇〇八・三）

# 中桐雅夫と投書雑誌

猪熊雄治

文学活動の出発期に、投書雑誌への投稿を重ねていた文学者は数多く見受けられる。木下夕爾もその一人で、前稿「木下夕爾と投書雑誌」[1]では、投稿活動を通して自己の詩作方向を開拓していった木下の姿を追跡してみた。木下の投稿活動は主に『若草』詩欄で展開され、その活動時期は中学卒業から上級学校進学までの、昭和七年から八年春までの一年間と、転学後の十年に再開され、断続的ながら第一詩集『田舎の食卓』（十四年十月）刊行直前まで続いた二期に分けられるが、このうち後期の期間は、木下よりやや年少の、戦後『荒地』に結集する中桐雅夫、鮎川信夫、衣更着信、北村太郎、三好豊一郎が『若草』に投稿していた時期とほぼ重なり合う。投稿ジャンルや、『若草』以外への投稿、また投稿期間など、投稿の様相は一様ではないものの、『荒地』の母胎ともいえる同人誌『ＬＵＮＡ』[2]刊行の基盤には、投稿活動を通して形成された交流関係があり、中桐、鮎川たちの投稿活動は彼らの文学活動の原点でもあった。鮎川の投稿活動をめぐっては、牟礼慶子氏の『鮎川信夫―路上のたましい』（一九九二年十月　思潮社）『鮎川信夫からの贈りもの』（二〇〇三年十月　思潮社）で詳述され、当時の中桐の動向についても言及されている。小論では『ＬＵＮＡ』を創刊編集した中桐の投稿状況を『若草』と、ほぼ時期的には『若草』と重なりあう形で投稿されていた『蠟人形』からあらためて辿ってみることにしたい。

## Ⅰ

中桐雅夫の投稿については、神戸一中の四年生に在学していた昭和十年から確認できる。『中桐雅夫全詩』（一九九〇年三月　思潮社）所収の「中桐雅夫年譜」昭和十一年欄に「また、この頃『若草』や『蠟人形』に白神鉱一名で何篇かの詩を投稿する。主なるものに「秋、歓楽」[ママ]（若草）、「快癒」（若草）、「宿命」（蠟人形）などがある。」と記述されているように、まず本名の白神名での投稿活動が開始され、佳作（堀口大学選）となった「秋・歓楽」（十・十二）が、詩での初掲載作となっている。白神名での詩掲載は「快癒」（『若草』十一・七）「宿命」（『蠟人形』十一・七）の他に、「少年は春を呼ぶ」（『若草』十一・二）があり、「掲載外佳作」として『若草』十一年六月号には「白い賦」という作品名が記載されている。その後白神名での投稿から、筆名を葦原哲に、さらに中桐雅夫に変えて、二誌への作品投稿としては『蠟人形』十三年二月号の「POESIE」、『若草』十三年三月号の

「愛情」まで、計十三編の詩が掲載され、『中桐雅夫全詩』の「初期詩篇」には、このうち中桐名で掲載された最初の詩「美しき孔雀に就て」（『蠟人形』十二・五）の他に、中桐名で発表された二編（「季節」『若草』十三・一、「POESIE」）が収録されている。投稿成績を見れば、『若草』では全て佳作で留まり、『蠟人形』でも投稿欄とは別頁の推薦詩集に掲載されることはなかった。

中桐の投稿活動は、その筆名によって白神鉱一、葦原哲、中桐雅夫の三期に分けられるが、この筆名変更は、投稿スタイルの変化も伴っていた。その一つが、投稿対象誌の増加であり、葦原名以後は、『若草』『蠟人形』の他に、『日本詩壇』『文芸汎論』にも投稿していた。さらに投稿作品のジャンルでも筆名の時期によって変化が生じ、白神、葦原名の時期には、詩だけではなく『若草』には短歌の投稿もなされていた。投稿欄での初掲載も、清水昶氏のインタビュー[3]に答えて中桐が語った通り、詩ではなく短歌だったらしい。インタビューで披露した作とは違うものの、おそらく十年十一月号「うた」欄で佳作（太田水穂選）となった「あけぼのの九月の山に流れたる雲の峰しろくひややかに澄む」がその作品だと思われ、以後十二年一月号までの約一年間、計七首の短歌が掲載されている。

## II

白神名から始まった中桐の投稿活動を今少し細かく見れば、注目される点として、詩、短歌とも二回目の掲載作品の表現が、最初の作品から変化していることがあげられる。詩では、「秋・歓楽」が文語体で書かれたのに対し、次掲載作の「少年は春を呼ぶ」からは口語体の作品となり、短歌でも、三月号の二回目の掲載作品からは自由律での制作となったように、中桐は初掲載直後に新たな表現の方向を模索し始めている。この変化が一挙に現れたのが、自由律に移行した短歌であり、「少年は春を呼ぶ」が口語体へ変わったとはいえ、二行目の「笑止や、骨と骨とが軋むその音よ。」といった文語的な措辞が残っているのに対し、白神名で掲載された次の二首は、十一月号掲載作からの距離を強く実感させる作品となっている。

紺青の水平線が見えて机上のダリヤ―私は一つの事をはっきりと知った　（十一・三）

今日もべた曇りだ―処女林にカーンとひとつ斧を打ち込みたい　（十一・六）

当初の伝統的な叙景歌から一変して、自由律によって自己の心情を大胆に表現していく方向への転換が打ち出されている。

自由律への移行の背景には、当時の『若草』にうかがえる自由律投稿の盛況、さらには自由律運動の高まりがあったのではないか。『若草』には、七年三月号から十二月号までと、九年二月号から十年十二月号までの期間、前田夕暮選の「新興短歌」欄があり、自由律短歌も投稿ジャンルの一種として募集されていた。九年十年頃は、夕暮に加えて、俳句の選者が荻原井泉水であったため、「『若草』の短歌・俳句欄は自由律全盛」（木原孝一「世界非生界」[4]）だったとされる程、『若草』には多くの自由律作品が掲載された。自由律短歌に限定して見れば、この頃は、久保田正文氏が「新短歌の歴史とその理論」[5]で、新短歌とも呼称されていた自由律を概観して、「昭和六年から七年へかけて雑誌の創刊が多く、活気を呈し、さらに昭和十年から十一年ころにもうひとつのピークがあり、昭和十三年ころからそろそろたじろぎがみえはじめ、…」と述べるように、自由律運動が活発化して

いた時期とほぼ重なり合う。中桐の移行にもこうした自由律の動向が働いていたのだろう。

中桐が自由律へ移行した十一年には、俳句欄の選者が水原秋桜子へと替わり、短歌欄でも自由律単独欄が消えたため、前年までの「自由律全盛」の印象は薄れているものの、「うた」欄と「新興短歌」欄を統合した「短歌」欄の選者を、当時『光』によって自由律を推進していた金子薫園が担当したように、短歌については、自由律が投稿できる環境は充分確保されていた。中桐の自由律が最初に載った三月号では、特選の半数は自由律から選ばれ、全体の掲載数の約半分が自由律となっている。この方向は金子が選者を務めていた十一年の間はほぼ継続され、中桐も自由律の評価を試すことができた。中桐と同学年であった衣更着信も、『若草』では、詩とともに自由律を投稿しているが、中桐や衣更着のような表現活動を試み始めた『若草』読者にとって、自己の表現を確かめる格好のジャンルとして自由律も選択されていたのだろう。翌十二年に『若草』短歌欄の選者が定型に復帰した土岐善麿へと交代し、自由律の掲載が激減すると、衣更着は早速「新興短歌」欄の復活を希望（「前号合評」十二・三）し、四月号の「前号合評」にも一読者からの「新短歌の入選がないのはさびしい。欄を別にしていたゞきたい…」との声が寄せられている。中桐自身の掲載も『若草』一月号が最後となったものの、『文芸汎論』十二年四月号の「各人各説」欄では、二月号の読後感として「詩が沢山あるのが嬉しい」との印象に続けて「此の進歩的な文芸汎論が何故新短歌を掲載しないのだらうか？」との要望も付け加えている。『若草』短歌欄の傾向が変わった後も、自由律への関心は持ち続けていたと思われる。

二回目の自由律掲載となった『若草』六月号以降、中桐の投稿活動は一段と活発化する。翌『若草』七月号には「快癒」が、さらには『蠟人形』への投稿も始まり、『蠟人形』七月号には「宿命」が掲載され、加えて両誌の通信欄への投稿も開始されていく。通信欄での掲載は、『若草』六月号、八月号「座談室」中の「読者通信」での二編と、七月号と八月号の『蠟人形』の「蠟人形の家」での二編があり、そのうち『若草』『蠟人形』への最初の二編は、両誌通信欄への初投稿として、いずれも周囲との齟齬や孤独感を強調した自己紹介が述べられている。初掲載となった六月号の投稿では、「僕十八。詩が二、三回、歌も二、三回載った位で、お恥しい次第です。アミーも居ないし、映画は学校で禁止だし、一寸つらいです、…」といったやや自嘲的な筆致での紹介が、七月号「蠟人形の家」では、「僕はまだ中学の五年なので、唯今サインコサインの三角に追はれて、詩の方は少々留守になつてゐ」る近況や「若草に本名で載せられて、父に叱られた」様子が語られ、それぞれ、「寒くて心迄凍りつきさう」になっているため、「誰方か暖いお便りをくれませんか？」、あるいは「どなたかいゝ筆名を教へてくれませんか」といった読者への呼び掛けが付け加えられている。八月号「蠟人形の家」への投稿でも、掲載記事や作品への感想とともに、読者との文通を希望する一節が見られ、この時期の通信欄への投稿は、環境への不満や同情を求める内容が主となっていた。夫人中桐文子氏によれば[6]、中学時代に学内で同人誌を刊行していたとされるものの、「断片的回想[7]」で述べられたような軍隊色の濃い校風への違和感もあり、『若草』『蠟人形』読者との交流を求める心情が強かったのではないか。

通信欄への投稿以外でも、中桐は『若草』読者との交流を求めていた。十一年五月頃からは神戸在住の『若草』読者が作っていた『若草』神戸支部の会合にも参加していたようで、八月号「若草の集ひ」欄に載った「神

戸若草支部五月例会の記」には、「初めて参加した白神兄」との記載がある。サークルへの参加から得られた同好者との交流の機会は、あらためて中桐の自由律への関心を高めたらしい。八月号「読者通信」には、支部メンバーからの教示のもとで自由律を続けたいとの意向が語られ、六月に開催された自由律歌人清水信を囲む座談会にも中桐は出席していた（「若草神戸支部六月の記」十一・九）。こうした会合への出席は中桐に刺激を与えたらしく、九月号「読者通信」欄には、「…神戸の若草の集ひは、なかなか有意義なもので、有難く思ってゐます。」との印象も語られている。

## Ⅲ

投稿活動の新たな展開に続き、中桐は投稿名を白神鉱一から葦原哲へと変更する。葦原名での投稿は、『若草』『蠟人形』の十一年九月号通信欄から始まり、以後『蠟人形』では十二年二月号、『若草』では十二年五月号まで続けられ、作品では詩四編（『蠟人形』十一・十一～十二、『若草』十二・四～五）と自由律四首（『若草』十一・十～十二、十二・一）が掲載されている。この二誌に加えて、詩では『日本詩壇』十二年四月号に「娼婦」が掲載され、五月号の「選外佳作」欄[8]には、「ニヒルの歌」という作品名が記載されている。又先にも触れた『文芸汎論』十二年四月号「各人各説」欄への投稿が葦原名でなされている。

『若草』『蠟人形』へは作品投稿の他にも、白神の時と同様、通信欄への投稿も続けられているが、その内容には変化が現れ、それまでのような近況報告を中心とした文面から掲載作品への批評を主とする投稿へと移っていく。他作品への言及は白神の時にも見られたが、葦原変更後は、ほとんどの投稿で複数の掲載作品が評価の対象となり、単純な印象だけではなく、中桐の視点もあわせて表明されている。通信欄への投稿から見れば、批評性の出現が、白神と葦原を隔てている指標となり、創作活動に対して自覚的になってきた中桐の姿勢も反映されている。

葦原名での批評は、投稿ジャンルに合わせて、自由律も対象としていた。『若草』での最初の批評となった九月号の「読者通信」欄では、清水信を囲む座談会での清水の発言を引用する形で、七月号で入選となった衣更着信の「女学生ら、今日もバスの中の小鳥となり、窓々に並ぶ黒い瞳よ」への評価が述べられている。この投稿では「…君の新短歌について、短歌科の清水先生の批評を藉りれば、表現が陳腐ださうだ。女学生を小鳥とは平凡だね。」との直截的な短評が語られ、同号での伏見という読者からの「…素材に対する表現が、率直…忠実に出されて」との批評と比べれば、清水信から触発されたとはいえ、中桐の厳しい見方が目立つ批評となっている。衣更着の通信欄への投稿は中桐より早く、十一年四月号「読者通信」（ただし筆名は衣更着敏）では「…ぼくも中学生だ。…ぼくくらゐの若い人が居たらお手紙呉れないか。」との希望を語り、また中桐が最初に登場した六月号「読者通信」では、中桐の投稿に隣接して掲載されているため、中桐も遠慮することなく同年輩の衣更着に対して、素直に語ることができたのではないか。この衣更着への批評に対しては、十二月号の「読者通信」に衣更着からの「…僕の入選短歌について御注意有難う。」との返信が載り、また十二年二月号「読者通信」では、中桐が衣更着の詩を賞賛するなど、衣更着との交友が始まる契機となった投稿でもあった。

衣更着への評言と照応するように、葦原名で掲載された自身の自由律では、「表現が陳腐」「平凡」を回避するため、主知的で大胆な表現が試みら

れている。

二階窓から乳房だけの性欲のぞく、食虫植物の粗い感触に蝿ども一滴の養分となり　（十一・十）

青すぎる空への焦燥、思ひきり蹴った石が自嘲的な弧度を描いて鳴る　（十一・十一）

恋は逃げ去って、黄昏、私である意識だけが甃路を歩いてゐる　（十一・十二）

机上のダリヤを倒したまゝ、ぼんやりと見つめてゐる私になってしまった　（十二・一）

白神名での二首よりも、葦原名の作品はよりイメージの表出に重点を置いている印象があり、モダニズム詩との関係が深く、自由律運動の有力な潮流ともなっていたポエジー短歌の方向を中桐にもうかがうことができる。

詩への批評でも、中桐は明快な口調で、掲載作品の優劣をはっきりと語っている。『蠟人形』九月号の「蠟人形の家」では、七月号の掲載作品を対象に、推薦欄掲載の五編には「よかった」の評価が、ある一編には「面白くない」との評価が与えられ、投稿欄の詩には三編の「よい」と「総じて女性は駄目であった」との判断が示される。八月号の「蠟人形の家」で「RO誌の生命」として「センチメンタル」をあげ、この号でも「センチメンタルを人一倍愛する」としながら「安価な感傷は好まぬ」とした視点からの評価であり、否定的な評価を下された推薦詩については、作中での主情的な語句の繰り返しが問題視されたのだろう。さらに同誌十月号「蠟人形の家」では、否定評価の指針として、八月号推薦詩四編への「よい」に対し、投稿欄の二編への「平凡」「ありふれた」といった基準も出されている。衣更着の自由律への評言とあわせて、新鮮味の乏しい作品への中桐の厳格な視線が見て取れる。

中桐の詩評では、否定の根拠だけではなく、「よい」とされる理由についての言及も見られる。『若草』十一月号「前号合評」では、九月号の佳作一編に「よい。こんな単々とした抒情が好きなのだ」と述べ、十二年二月号の「蠟人形の家」でも、推薦詩への「淡々とした抒情はすばらしい」との言及があり、「安価な感傷」の対極として、抑制された感情表現を求めていた。「前号合評」で、九月号推薦となった「雨後」（青海清）が「たまらない詩情」と絶賛されるのも、やはり主観の直接的な表出を控えた手法からではないか。ただし、「淡々とした抒情」については肯定一辺倒で語られるのではなく、二月号「蠟人形の家」では推薦詩を賛辞しつつ、抑えた表出から生じる「…素朴といふことは時として表現の平凡」になる可能性も指摘されている。表現の凡庸さを嫌う中桐の姿勢がここにも現れ、詩評でも技法に着目した発言も出されてくる。『若草』四月号「前号合評」では、二月号推薦詩「旅装」（三城えふ）、「路地」（柚原貝二）について、佐藤惣之助の選評にある「配置の巧　流麗な手法」を受けて「推薦の三城氏。トランスポジションのせゐで快い。…柚原氏。僕は嘗てかういふ境地を歌はうとしたができなかった。うまい。」と述べている。過剰な措辞を退け、さらに表現の清新さを確保する方向が、この時期の中桐が想定した抒情詩のあるべき姿だったと思われる。

葦原名で掲載された詩を見ると、詩への批評で示した視点は自己の創作にも反映されている。例えば白神名での「宿命」では、「壁にかけてある蠟細工のピエロはニッと微笑み」といったイメージが描出される半面、「こころよ、吹千断（ふきちぎ）られたこころよ」「熱情（パッション）よ、切々と胸をうて―うてよ。」といった主観的な感情をむき出しの形で表す部分も、作中には現れていた。

しかし葦原名での最初の二編「朝の詩」「或る港街の序詩」になると、こうした章句は姿を消し、「安価な感傷」の部分が排除されている。代わりにより強く打ち出されるのが、イメージの提示を主軸とする詩法であり、内面の直接的な表白から、イメージを通して内面を描く姿勢へのこの転換は、自由律で模索された方向と重なり合う。この方向は『若草』に連続掲載された「ぼくたち」「独楽」でさらに推し進められ、イメージと内面の描出を融合させたこの二詩のうち、特に平易な語句が目立つ「独楽」は、『若草』読者からの絶賛が寄せられた作品となった。七月号「前号合評」には、「詩欄で完成した詩人といふ方」の一人に中桐を数える評価や、衣更着の「最もやさしくて、最も美しい詩の一つ。誰もが見た事のあるやうな少年のゆめである。」との評が掲載されている。

## Ⅳ

『若草』では「独楽」が葦原名での最後の投稿作となり、六月号の「前号合評」と、筆名変更を告知した「読者通信」への投稿からは中桐雅夫が筆名として使われている。『蠟人形』では『若草』より一号早く、五月号の「美しき孔雀に就て」から、『日本詩壇』でも同様に五月号[9]から、『文芸汎論』「各人各説」への投稿でも五月号から中桐名が使われ、以後『若草』『蠟人形』へは、中桐名による約一年間の投稿活動が続けられる。先述の通り、葦原の時期と中桐の時期とでは、投稿種目や投稿対象誌に違いが指摘できる。ただしこうした投稿スタイルの変化だけではなく、中桐名への変更後は、葦原から続く投稿ジャンルの内容にも変化が生じている。中桐は、中桐名への変更とほぼ同時期に同人誌『ＬＵＮＡ』（十二・四）を創刊したが、こうした新たな表現媒体の獲得により、中桐の投稿活動も、『ＬＵＮＡ』との関係の中から内容、方向が模索されることになる。その影響が最も強く発揮されたのが、通信欄への投稿であり、『ＬＵＮＡ』の活動を告知し、あわせて同人募集を呼び掛ける等、『ＬＵＮＡ』運営を反映させた投稿へと大きく変わっていった。

通信欄での『ＬＵＮＡ』への言及は『若草』『蠟人形』とも七月号から始まっている。『若草』「読者通信」では「若草の少年詩人よ、次代の詩を僕たちで背負はうではないか。」との「大きな抱負」から「純粋詩誌『ＬＵＮＡ』」が創刊されたと述べ、創刊号への寄稿者として秋篠ナナ子、南雲幸一、衣更着信の名をあげた後、照会先の編集部として金森京介の住所を記載している。「蠟人形の家」ではまず白神から葦原へ、さらに中桐となった筆名変更を知らせた後、「若草」とほとんど変わらない文面で勧誘と『蠟人形』投稿者からの寄稿を告げ、照会を促す文で締めくくられている。これらの寄稿者が創刊時の同人であったかは不明だが、神戸一中の同級生で姫路高校へ進学した小鷹孝らと、中桐が勧誘した『若草』投稿者を同人としていた『ＬＵＮＡ』の基盤を、さらに二誌の読者によって拡大しようとしたのだろう。また創刊当初は同人だけではなく、読者に馴染みのある投稿者や、中桐が読んでいた同人誌関係者へ依頼した寄稿作品も掲載されていたようで、二輯（十二・五）の刊行を伝えた八月号「読者通信」では、『若草』との縁が深い寄稿者として木下夕爾、石川雄次郎、三枝響、村田有爾の名を列記し、また『ＶＯＵ』の同人であった岸本弘からの寄稿も伝えている。付言すればこの「読者通信」では発行所として金森の住所に変わって中桐の住所が記されるように、中桐の自宅が発行所になったのは二輯以降だったらしい。

八月号以降も、中桐は定期的に『若草』の「読者通信」欄へ『ＬＵＮＡ』の刊行情報を投稿していった。十月号「読者通信」では、六輯（十二・九）の刊行と『若草』投稿者の同人として秋篠、衣更着、路杏子、津田英介をあげ、「…更に大なる飛躍を敢行するため」「若草に詩を書いたことのある『恐るべき子供達』」の参加を求めるなど、七月号と同様の強い意気込みを感じさせる文面から『ＬＵＮＡ』の紹介と同人募集が語られている。このような熱い口調での紹介は、翌十三年にも見られ、一月号の「読者通信」では「四月から毎月缺かさず」「育ててきた」『ＬＵＮＡ』の九輯（十二・十二）刊行が、また三月号では『ＬＵＮＡ』の「enfant terrible が次代の詩のために闘ってゐる」点が強調されるように、『若草』読者の関心を喚起し続ける投稿が重ねられている。

通信欄への投稿でいえば、葦原の時期に試みられた詩評もしばらくは継続されていた。中桐名変更後も、葦原の時に見られた、自己の視点を端的に寸評で示し評価を与えていく姿勢は踏襲されている。六月号の「前号合評」では、「平仮名の使用がよい雰囲気を醸してゐる」「最後の『昇華』といふ語が全体を生硬ならしめて不可」「比喩が梢々（ママ）不分明」といった、より具体的な表現に即した短評を一作ごとに加えられ、八月号では、佳作となった複数の詩に「古いリリシズムの余映」「博物館に入れたのではなかつたらうか」と簡潔な、しかも手厳しい評言が述べられる。十月号でも佐藤惣之助の批評を疑問視する提起もなされ、衣更着への短歌評から見られた率直な批評は、中桐名以後、より鮮明になったともいえる。創刊を告げる文面にも見られた『ＬＵＮＡ』刊行がもたらした気負いが、詩評にも投影されたのだろうか。ただ中桐の『若草』掲載作への批評は、十月号以降掲載が見られなくなる。「読者通信」への投稿に『ＬＵＮＡ』刊行に熱意を傾ける中桐がうかがえるとすれば、詩評の投稿状況からは、投稿活動よりも『ＬＵＮＡ』運営を優先させていく様子が推察できる。

中桐名変更後に掲載された投稿詩としては、『若草』へは「翰」（十二・十、『ＬＵＮＡ』四輯にも掲載）「季節」「愛情」の三詩が、『蠟人形』へは「美しき孔雀に就て」「POESIE」二詩があり、その他に『日本詩壇』（十二・六）には「恋情」が、『文芸汎論』（十二・九）には「ユマニテ」（『中桐雅夫全詩』に収録）が掲載されている。これらの掲載詩にも葦原名の時期とは違う傾向が現れてくる。葦原名での傾向を引き継いだ、イメージと内面を融合させた抒情詩も掲載される一方、『ＬＵＮＡ』で模索されていた新たな方向を反映させた作品も投稿されていた。『ＬＵＮＡ』四輯（十二・七）に載った中桐のエッセイ「詩と生活について」で、三輯（十二・六）に発表された自己の詩「女は」（未見）を「僕はあの詩に於て、ひとつのサタイアを言つた積もりであつた。」と説明したように、この頃から中桐は「サタイア」の詩も追究しつつあった。四輯に「翰」とともに発表された「童話」は抒情詩の性格を持つ詩である一方、もう一つの短詩「景」にも「サタイア」の性格は感じられ、六輯（十二・九）の「雑話的思考」、八輯（十二・十一）の「世紀頌」は「サタイア」色が濃厚に出された詩となっている。十輯（十三・一）の同名詩「世紀頌」も同様で、外部の読者から「サタイアそれのみに憑かれた作」（巌土夫）と評される程、時代へ批評が強く表現されている。『ＬＵＮＡ』以外の作品でも「ユマニテ」「POESIE」からは、抒情詩から離れ「サタイア」に接近していく詩風が感じられる。

「サタイア」の模索は、この時期中桐が同時代のモダニズム詩人に視線を向け始めた姿勢と連動している。例えば『文芸汎論』の「各人各説」欄へは、「長田恒雄の音楽は悲惨なサタイアといふべく…」（十三・一）、「門

馬氏もよく村山太一のサタイアも結構…」（十三・二）との寸評が続いて投稿されている。『若草』詩評の代わりに、中桐は『文芸汎論』「各人各説」欄で同時代の詩人への批評を展開するのであり、批評のポイントとして先輩詩人の「サタイア」に着眼している。一方「サタイア」だけではなく、「美しき孔雀に就て」から「恋情」「季節」「愛情」への抒情詩の流れを意識したような発言も、同時代の詩人の動向を視野に入れる形でなされている。『ＬＵＮＡ』八輯の「雑録」欄では、『新領土』六号（十二・十）「後記」で村野四郎が「多くの旧式詩人たち」を揶揄した「ハライタ的ゼスチュア」の表現を転用して、「センチメンタリズム」の否定が語られている。一年前の批評では「センチメンタルを人一倍愛する」とした中桐は、同時代の詩人の動向をうかがいながら、自己の方向の転換を探っている。中桐にとって『ＬＵＮＡ』はこうした試行を自己確認できる場だったのであり、投稿詩もその試行が映し出されていた。こうした「サタイア」や「センチメンタリズム」からの脱却を志向する動きに対して、抒情詩投稿の機関である『若草』『蠟人形』との距離が意識されたのだろう。『若草』では二年五ヵ月程、『蠟人形』では一年七ヵ月程続けられた投稿活動から、中桐は十三年の早い時期に離れていった。詩以外の『若草』への投稿は十三年七月号まで確認できるが、この「読者通信」への寄稿でも、やはり「…僕らの『ＬＵＮＡ』に来れ」といった『ＬＵＮＡ』紹介と同人募集が語られていた。

注（1）『学苑』平成十九年一月号

（2）昭和十二・四～十三・五　十四輯より『ＬＥ　ＢＡＬ』と改題、さらに二十五輯からは『詩集』と改題され、その後『山の樹』と合併した。

（3）清水昶『詩人の肖像』（一九八一年八月　思潮社）

（4）木原孝一『現代詩文庫47　木原孝一詩集』（一九六九年四月　思潮社）所収

（5）久保田正文『近代短歌の構造』（一九七〇年二月　永田書房）所収

（6）中桐文子『美酒すこし』（一九八五年六月　筑摩書房）

（7）田村隆一『若い荒地』（一九六八年十月　思潮社）所収

（8）五月号の「選外佳作」欄には、中桐雅夫名による「蜃気楼」も記載され、中桐は同号に二つの筆名で投稿を試みていた。なお中桐の五月号への投稿については、中井晨氏の『荒野へ　鮎川信夫と『新領土』（1）』（二〇〇七年一月　春風社）から教示を受けた。

（9）注（8）参照

資料調査では、日本近代文学館、神奈川近代文学館、本学図書館近代文庫のお世話を頂いた。また『現代詩1920―1940　―モダニズム詩誌作品要覧―』（和田博文監修　二〇〇六年十月　日外アソシエーツ）並びに『現代詩誌総覧⑤』（現代詩誌総覧編集委員会編　一九九八年一月　同右）『現代詩誌総覧⑥』（同会編　一九九八年七月　同右）『現代詩誌総覧⑦』（同会編　一九九八年一二月　同右）を活用させて頂いた。併せて御礼申し上げます。

（いのくま　ゆうじ　日本語日本文学科）